

「底が突き抜けた」時代の歩き方 286

身をもって目撃せよ 身をもって参加せよ - ソンタグの問い

文学の外で起きていることについて、文学は無関係だから黙って通り過ぎるのではなく、間違ってもいいし、あとで訂正せざるをえなくなったとしても、そのときに「こう感じた」ということは発言したほうがいいし、そのことがむしろ文学にとって非常に重要であるというのが、思想家の吉本隆明の立場であった。作家の高橋源一郎であれば、その立場を共有しながら、作家は自らの小説をもって自らにとって最も不得手な領域に向き合うべきである、という考えが提示されていた。私も彼らの考え方に異論がないばかりか、文学や思想に限らず、表現そのことにとって極めて基本的な前提であると把握している。文学にとっての課題は文学の外に限りなく広がっているし、表現すべきなにかはまだ表現されていないことのなかに深く埋もれているだろうからだ。

彼らのそのような立場は、基本的に私の立場でもある。だが彼ら自身感じているかどうかはわからないが（たぶん感じていないだろうが）、その立場には深く場所というものがある。どの場所の中で「こう感じた」のかが不問にされている。むしろどこであろうとも、「こう感じた」ということを言葉に出していったほうがよいということなのだ。そこでは「こう感じた」主体が、「こう感じた」ことを恐れずにはっきりと口にすることが問われている。問うているのは誰か。「こう感じた」主体自身である。自分が自分に対して、どうしてもそう問わずにはいられなくなっているのだ。ということは、自分が自分に対してそう問わずに済まされるなら、すべてが容赦されてしまう。自分の自分に対する関係が一切なのだから。

いうまでもなく関係は多元的であり、自分の自分に対する関係の外にもいくつかの関係が重なり合っており、それらの関係に自分の自分に対する関係も明確に規定されているから、自分の自分に対する関係もまた、自分でない自分に対する関係へと逸脱していく。「こう感じた」ことをはっきりと発言せよ、と自分に強く押し迫ってくるのは、本当は自分が立っている場所である。どの場所の上に立っているかが決め手であるといっただけよい。その場所に立つなら、自分が嫌であるとなんであるとなら、「こう感じた」ことははっきりと言わざるをえない。もしそうした発言を回避するなら、その者は自分がこれまで立っている場所から降りたとみなさざるをえなくなる。しかし、誰がそうみなすのか。彼自身ではない、彼の立っている場所がそうみなすのだ。場所というものは、「こう感じた」ことを発言することのなかにしかありえないからである。

したがって、「こう感じた」ことを発言することのなかには、すべて場所が内在している。あるいは、構築されてきている。しかしながら、その場所は「こう感じた」ことを発言する者のなかにしかないから、他の者はその場所を共有することもできないし、かかわることもできない。つまり、「こう感じた」ことを発言する場所は現実的ではありえないから、発言もまた、現実には交差する契機をもたない。このことは一体なにを意味するかといえば、「こう感じた」ことを発言する言葉には自分が申し掛かっている、現実が少しも申し掛かっているということだ。したがって、自分が申し掛かった言葉を自分がずっと引きずっていくその道筋には、現実が加えてくる引っ掻き傷や断層が少しもみられない。

現実のなかに身を置いてしか発することのできない言葉というものがある。自分と現実の双方が申し掛かってくる言葉だ。自分の中だけではけっして出会うことができず、自分が突き当たった現実の窪みの中から発される言葉に出会うためには、「こう感じた」ことを発する言葉は、そこに内在する場所をかかえこんだまま、そこから飛び出すことによって現実が渦巻く場所へと赴かなくてはならない。

作家であり思想家でもあるスーザン・ソントグと作家の大江健三郎が、99・6・14付から99・7・15付までの朝日新聞紙上で往復書簡を交わしたことがあり、6・16付紙上でソントグは、《ヴォルテール、ゾラ、ソルジェニーツィンと、不正の犠牲者を擁護すべく権力に向かって真実を語ったことで、永遠の栄光に値する作家は少なくありません。でも、すぐれた作家はかならず正しい大義を主張するなどとは、だれもまともに信じていません。残念ながら、ほとんどの人々と同様、ほとんどの作家も体制順応派で》あり、《コソボに住む非セルビア系の人々百万人以上を残酷な目にあわせ、彼らの土地から追放して、行き着くところまでいってしまった「民族浄化」政策の、もっとも雄弁な支持者はセルビアの高名な作家たちでした。》と語り、次のように続けている。《ご存じのように私は作家としての全生活を通じて、公然と自分の立場を表明してきました。アメリカの帝国主義とベトナムにおけるアメリカの戦争への反対などの政治的な立場しかり。文化的な立場はあまりにも多く複雑なのでここでは説明をはぶきます。広島・長崎の意味について書き始めたときのあなたがそうだったはずですが、私も立場を表明することは自分の義務だと感じたのです。サラエボが包囲されていた何年間にも、そこで自分を役立てる方法を探ることが義務でした。

それでいて同時に、どう申しましょうか、意見をもつことはたやすい、たやすすぎる、という自覚がありました。たとえ正しい意見でもそうです。

論争的的となっている意見を支持すれば、支持者はいやおうなく有名になり目立ちます。たとえそれがその行為の目的ではなくとも。

私はずいぶん前に自分に課したことがあります。自分がそれまで知らなかったり、こ

の目を見たことがなかったりする事柄については、けっしてどんな立場もとってはならない。ベトナムでの戦争については68年と73年にそこへ行っているので語ることができます。サラエボでもほぼ3年間にわたり相当の時間を過ごしました。アルバニアにも最近二度滞在しました。

善意があっても思慮深くとも、直接の体験の具体性にとって代わることはけっしてできません。リアルなものの衝撃。私たちはフィクションの作家としてこのことを知っているのではないのでしょうか。

身をもって目撃すること、参加すること。この問題をだしたわけを言いましょう。旧ユーゴスラビアにもアルバニアにも行ったことがなく、その地の人々の歴史や地理もまったく見当もつかない人々が、バルカン半島において10年も続いた恐ろしい事態をめぐり立場をとる。その多くがあまりにも私の予想どおりの立場だったことに自分でもショックを受けたのです。どんな戦争地帯にも一度も近づいたことがなく、戦闘にくみしたり、爆撃のもとで生活したりするとはどんなことかこれっぽっちの考えもない。それがみえみえのアメリカやヨーロッパの知識人たちが尊大にもあの戦争について語るのを目にして、怒りを禁じえません。

真剣であること。(…) 真剣であるということは責任をとるということです。でも、独善的にならずに正しくあるにはどうすべきか。どうすれば「私」を放棄できるか。なんであれ、自分はこのことなら知っているとの判断は、この「私」をとおして得るものではあるのですが。(シモーヌ・ヴェイユは、「私たち」よりひどい唯一のもの、それは「私」だ……と語りました。))

ソクタグがここでまず強調していることは、冒頭から書き続けてきた文脈に即すると、物書きが文学の外であれ、自分の得意の分野の外からやってくる事態であれ、吉本隆明や高橋源一郎がいうように、たとえ間違っているかもしれないとしても、後追いではなく、そのときに「こう感じた」ことを発言したり、作家として小説で立ち向かっていくことは、並々ならぬ決意と覚悟を必要とするし、物書きとしての危うさも一挙に露呈することになるだろうが、それでも「こう感じた」ことを発言し、小説で立ち向かうことは、「たやすい、たやすすぎる、という」ことである。「自分がそれまで知らなかったり、この目を見たことがなかったりする事柄については、けっしてどんな立場もとってはならない」とソクタグがいうとき、ベトナム戦争について語ろうとするなら一度でも彼の地に踏み入ったうえで語るがよいし、サラエボに触れるならその戦火を潜り抜けるなかで語ってみよ、と彼女はいつていることになる。

今回の同時中核テロについて吉本隆明が、テロリストたちは旅客機の乗客を道連れにせず、途中で降ろしたうえで突撃すべきではなかったか、と語るのと同程度の途方もなさをソクタグは提出しているように思われる。アフガン空爆について言及するのであ

れば、アフガンが猛攻撃されている中で空爆に同意するなり、批判してみせよ、といっていることに等しいからだ。とんでもない、アフガン空爆について書きたければ、アフガンにどうぞということになってしまうと、一行も書けなくなるではないか、という当然湧き起こる反発の声に対して、では一行も書かなくていいではないか、一行でも本当に書きたければ、アフガンの地に足を踏み入れる度合いで書くべきだ、とソクタグはしているのだ。実際、これまで彼女はそうしてきた。

ソクタグの言葉を途方に思ってしまうのは、ある種の不可能性をそこに感じてしまうからだ。その不可能性について、哲学者の鷲田清一が『朝日新聞』(02・2・15)のなかの小エッセーで、次のように連想させてくれる。《「走りながら読む書物はないだろうか? と真剣に考えたことがある」。そんな寺山修司の言葉がいまも耳についている。車中の読書のことではない。「『時』という名の書齋と、『教養』という名の椅子、それに少しばかりの金銭的余裕をもちあわせている人生嫌いの人たちに、代理の人生の味わいを教えてくれるだけ」の書物への訣別宣言だ。

同じ寺山は、「たたみ一畳位の大きさで、とじこみの部分は蝶^{ちょうつがい}番がついて」いる鉄の本も夢想していた。その鉄のページをめくってそこに刻まれた「意味の世界」と対峙しうるだけの体力をもってせねば読めない本を。》

走りながら書かれた本は、「たたみ一畳位の大きさで、とじこみの部分は蝶^{ちょうつがい}番がついて」いる。走りながら書かれた本を読むには、走る以外にない。そこで必要とされるのは、「体力」であるよりも、むしろ書きながら走り、読みながら走り抜ける問いの躍動感かもしれない。我々の立っている地球は一度も静止していることはなく、たえず自転しながら公転しているという感覚を我々のスタイルに取り入れるなら、書くことでそこへ飛び込み、読むことでそこへ飛び込み、飛び込む度合いでしか「鉄の本」は開かれていかない。夢想ではなく、走りながら書き、書かれた言葉をその場所に植え付けようとしているソクタグは、鉄でできた本と紙でできた本との区別がもはやつかなくなっている世界の混乱と無責任について、憤りながら必死に闘っているようにみえる。

「善意があっても思慮深くとも、直接の体験の具体性にとって代わることはけっしてできません。リアルなものの衝撃。」あるいは、「身をもって目撃すること、参加すること。」とソクタグがいうとき、それは経験主義や現場主義から発されているものではない。ここでは必ずしもそうしているわけではないが、もしサラエボについてなにかをいおうとするのであれば、頭ではなく身体でいわなければならないのではないかということだ。書くのであれば、頭だけで書くのではなく、身をもって書けということだ。彼女が「どんな戦争地帯にも一度も近づいたことがなく、戦闘にくみしたり、爆撃のもとで生活したりするとはどんなことかこれっぽちの考えもない。それがみえみえのアメリカやヨーロッパの知識人たちが尊大にもあの戦争について語るのを目にして、怒りを禁じえ」

なくなるのは、自分を安全地帯に置いて語られる言葉が、なにかを語っているかのように尊大にも彼らに思い込まれているからだ。

物書きが文学の外で起こったようにみえる事態に対して、「こう感じた」ことがいかに困難で苦渋に感じられようとも、その質もまた、「たやすい、たやすすぎる」といわざるをえなくなるのは、身を移動させることなく、言葉だけをそこへ向かわせようとするからである。ソクタグはここで、言葉のみでなにかに触れることは可能か、戦場に言葉だけを参加させることは可能なことなのか、を問いかけているのだ。爆撃のもとで生活している人々にむかって、爆撃そのことにむかって、爆撃のない青空が広がっている、安閑とした日々が流れる生活に浸るなかから、一体どのような言葉を発することができるのか。そこから発される言葉を爆撃のもとで、一体どのように受けとめられるのか。そこに根本的に欠落しているのは、言葉は語るができるけれども、肝心なことはなにも語るができないということに対する敏感さである。

言葉だけを参加させることが不可能なのは、その言葉には責任を負うことができないからだ。ソクタグが「真剣であること」とまなじりを決するようというのは、言葉のみで「真剣であること」が嘘であることを知り抜いているからである。だから、「真剣であるということは責任をとるということです。」とたじろぐことなくいい切るのだ。「責任をとる」ことのできない言葉は、責任などたたくても構わないところで発されればよいのである。いうまでもなく言葉は責任をとることはできない。責任をとることができるのは、あるいは、発された言葉の責任を負わなくてはならないのは、言葉を発した者の身である。つまり、発される言葉と身はつながっており、言葉と身が切断されるところでは、言葉の責任を負う身そのものが行方不明なのだ。

同時中枢テロについて、旅客機の乗客は降ろすべきであったと吉本隆明が語る途方もなさ、ソクタグがここで決然といい切る途方もなさの相似性はすでに語ったが、その途方もなさの背後に吉本隆明は「存在論理」の観点を設定していた。その観点が、量子力学や量子論における《歴然と、電子であろうと、中性子であろうと、原子核であろうと、それが「ある」ということは、「ある」ということに影響を与える。つまり、「ある」ということは、「ある」ということの影響をこうむることを抜きにしてはいえないという物質観》(『群像』02・1)を種としていることを彼は明かしていたが、不思議なことにソクタグの語っていることも、量子力学、量子論を抜きにしては語れないことなのである。「身をもって目撃すること、参加すること」によってしか、爆撃の影響をこうむる生活の中で揺らめいている人々になにかを語りかけることはできないからだ。

ところで、ソクタグと往復書簡を交わしている大江健三郎は、彼女のその言葉をどこまで受けとめているのだろうか。彼は7・13付でこう返答している。

《あなたが、《善意があっても、思慮深くとも、直接の具体性にとって代わることはけ

ってできません》といわれるのに、私は同意します。自分の書いていることの直接的な無効性を知っているゆえに、私はヒロシマや沖縄について文章を発表しながら、顔を伏せる思いがしばしばあったのです。しかも、さらに書き続けないではいられなかったのです。

小説を書く際にも、同じことが本質的な課題としてあります。私は新しい小説『宙返り』のために広告用の短い言葉をもとめられて、《いま私は小説に、「魂のこと」をする場所を作りたい。それもリアルに》と書きました。それがあなたのいわれる、私たちがフィクションの書き手として知っている《リアルなものの衝撃》という言葉と通いあうものであることを私は望みます。

私の考えている「魂のこと」とは、若者たちが、精神においても感受性においても生きる技術テクネーにおいても「真剣であること」をつらぬき、それらを統合しようとする時、現れてくるものです。「魂のこと」をする場所とは、そのための開かれた小さな共同体です。》

見事なくらい、ソクタグの言葉が大江健三郎には届いていないことが歴然としている。もう少し厳密にいうと、私が把握しているソクタグの言葉と、大江健三郎が理解しようとしているソクタグの言葉とは遠くかけ離れている。私の理解では、彼が引用しているソクタグの「直接の具体性」であれ、「リアルなものの衝撃」であれ、「真剣であること」であれ、彼女の言葉はすべて彼の文脈の中に読み損ねられて収められている。彼女のいう「直接の体験の具体性」とは文字通り、「身をもって目撃すること、参加すること。」であって、彼がいうような「ヒロシマや沖縄について文章を発表」することではない。「リアルなものの衝撃」にしても、爆撃のもとで生活することの衝撃を意味している筈であって、「リアルに」小説の中に場所を作ることとは全く異なる。「真剣であること」に至っては、本気やまじめさと同等視されて笑いたくなくなってしまうほどである。

そこには、現実の場所の中に身を置くことによって「責任をとる」という、ソクタグが開示している発想は皆無である。「善意があっても思慮深くとも」、ソクタグが語りかけようとする言葉は、大江健三郎の立っている場所ではどうしても無意識の曲解なくしては受けとめられないのだ。それはたぶん、彼の所為ではない。ソクタグがあまりにも途方もないことをいっているために、彼の常識的な小説一言語の世界では受けとめるのにどうしても無理が生じるのだ。彼女もまた、あまりにもラディカルでありすぎるために、書く言葉の中でのみ急進的であろうとする業界で理解されるのは困難であることが、そこに孤独に浮き彫りにされている。

2002年3月2日記